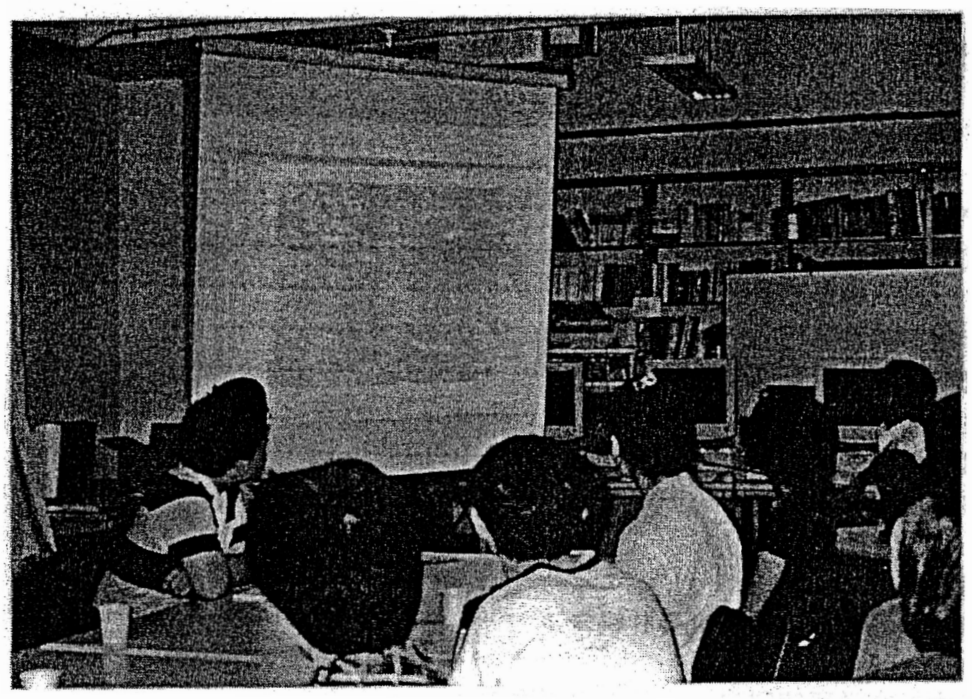
京都大学地理学談話会

会　報

第13号



オープンキャンパス(2001)当日の様子

2002

［目　次］

寄稿
地域を変える者と観察する眼〔広瀬　伸：昭和54年卒〕……1
離島への眼差し〔犬塚　泉：平成元年卒〕……3

研究紹介
情報化時代における起業〔外国人共同研究者：青山裕子先生の研究計画〕……4

講演会の報告〔A.J.フィールディング先生・小方　登先生・山村亜希先生〕……6

研究室便り
＜オープンキャンパスについて＞……10
＜国際交流について＞……10
＜研究室の動静＞……11
〈新メンバーの自己紹介〉……11
〈昨年度の実習旅行〉……12
〈学部卒業生・院生の進路〉……12
〈院生の研究状況の報告〉……12
〈学位の取得〉……13
〈2002年度講義題目〉……13

事務局から
＜地理学談話会　2001年度会計報告＞……13
＜訃報＞……14
＜京都大学文学研究科フォーラムのご案内＞……15
＜『史学』公開シンポジウムのご案内＞……15
＜2002年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞……15

～寄稿～

地域を変える者と観察する眼

農林水産省 広瀬 伸（S54 学部卒）

「えっ，文学部ご出身ですか!?」。私が履歴を口にするたびに決まって返ってくるのは，この言葉でなければ絶句です。農林水産技官の役職と文学部史学科人文地理学専攻の距離は，それほど一般の想像を超えているようです。

私は２年間だけの在籍で談話会の末席に連なっています。農学部農業工学科（当時）から地理に大学院を受けて二次で落ち，学士入学してそのまま卒業したので，結果的に公務員試験の猶予期間を文学部で過ごしたことになります。田中和子，藤井正，松尾容孝の諸君が同期にいます。

学士入学の面接で，院入試の専門科目と英語は文句なかったんだけどねえ，との評価を故水津先生にいただき恐縮しました。それまで「学校地理」にはいささか深く浸かっていたのでしょう。小学校の社会科で世界各国の首都名をすべてそらんじ，中学校の地理で出身地大阪市のゴミ処理と上水道をレポートにした少年は，大学入試でも地理を選択し，故藤岡先生の大教室での名調子を楽しみに教養を過ごしました。でもそこまで，独文の素読能力と“formation”だったか，学術用語の知識を欠いていたのです。

農学部で農地（村）計画学を専攻したのは，「自然と人間の間の物質代謝」として食料生産をとらえる思想と「計画」という概念に惹かれ，その交差点に身を置きたかったからでした。当時，ドイツ留学帰りで彼地の中心地理論に基づく地域計画や集落整備を講義される助教授とＦＨＧ出身の助手がおられました。

それで，私の意識では重心を少し移しただけで，地理学の奥義を究めたいなどと大それた野望があったわけではありませんでした。手元にある二つの卒論が物語っています。院入試に提出し論文の態をなしていないとの講評を受けた農学部の卒論は，京都府南山城村で士族授産時に開拓された集落について，physical planning の面から変遷を取り上げました。文学部では岡山県津山市周辺で行われた農地開発がもたらす地域の変容を扱っています。モノから地域へ転身したはずでした。

しかしこれにも厳しい評価を応地先生から頂戴しました。やはり地理学専攻生になりきれていなかったのかもしれません。元の研究室から文学部へ通学し，農学部の同期の院生と研究会や調査をともに行い，彼らの土地分級のデータとなる土壌サンプリングを手伝う代わりに経営の再編や熟畑化についての農家聴取に加わってもらう形で互いの方向に論文を仕上げたのですから。

文学部は異界でした。「地理学とは何か」そのものが一大テーマになる驚きに，ノート読み上げ・筆記という伝統的な講義のスタイルが加わって，呆然としました。でも，学問は自分でするものだという放任主義と紙一重の教育方針や，小汚い白衣の石川さんをはじめ先生方の鋭い挑発があり，知的欲求の満たされる日々でもありました。

卒業後 23 年余，農林水産省で農業水利や農地・農道・集落の整備など，農業分野の公共事業に携わっています。命とあらば喜界島でも諫早湾にでも赴く仕事です。地域を観察する立場から「建造環境」を形成する側に再び転身したのです。

ドイツの官庁には地理学出身者が少な

くないようです。けれども私は，今まで業務上地理学出身者ないし地理学者と関わりがありませんでした。唯一の例外は３月まで出向していた公団の仕事で，棚田の整備構想づくりに奇しくも金田先生のお名前があったことです。

わが国では人間の営為を土地に深く刻み込んで歴史を歩んできたわけですから，前近代の歴史地理の対象をはじめとして，農業工学や農業土木事業と地理学には縁があるはずです。それで国土形成史の本格的発端を解明した「農村計画としての条里制」に接したとき，その着想に感銘を受けました。恥ずかしながら，戦前に著者の米倉二郎先生が他ならぬ京大の農業土木に一時在籍されていたことを知ったのはごく最近のことですが。

近年，大学の農業工学科は多くが「地域環境工学」を名乗るようになっています。農業土木学会が最近出したビジョンは多少趣が異なり，地理学とも縁の深い「水土」をキーワードに置いています（同学会ホームページ参照）。田中さんに収集の協力を仰いだ文献の一つによれば，風土／水土は似た内容を持ちながらも，風土は社会・文化など人の要素，水土は自然の要素が強い概念という説があるそうですから，字面が即物的なうえに意味内容からしても，農業土木の対象としての扱いはあながち見当外れではないでしょう。対象を農地から農村地域全般に拡げている農業土木の世界にあっても，地理学という地域を観察する確かな眼との連携が，必要に迫られてぼちぼちでも図られてきているようです。

ただ，良縁ばかりではなさそうです。お顔が思い浮かぶ当時の院生諸氏が古代・中世の景観の復元に精力的に携わられてきたことは存じ上げていますが，その景観を圃場整備が壊したとのそしりは免れません。また，農水省が最近進めている田園空間整備事業でも，標榜するエコミュージアムづくりには人と運営が重要なのに，ある地区の助言者であられる金田先生によれば，理念に反し実態は旧来の慣性で限りなくハード整備に近づくという評言をいただいています。それらの苦言はごもっとも。一方に近代化，合理化を求める農家の熱烈な要請を担っているものの，身に覚えがあり，耳は痛みます。

こうした引き裂かれるような想いを，青森県庁への出向時にも新たにしました。かつて津軽平野の地形図上で強烈な印象を受けた「多条並列灌漑水路」（故籠瀬良明氏の命名）を巡っての経験です。この奇観は弘前藩の旺盛な新田開発に由来する用水不足を解消するうちに形成されたものですが，近年の農業水利・圃場整備で優良な農地になる過程で，今では痕跡をたどることも困難になってしまったのです。

この錯綜する水路では，転落水死事故の多発を機に，明治期に水虎様という独特な信仰が生まれました。近畿の地蔵尊のように集落ごとに河童像を祀り，取られないように，そして水不足にも願いをかけるもので，折口信夫や渋沢敬三が注目し，水路形態が一変した現在も細々と命脈を保っています。この信仰についてささやかな報告をまとめながら，願いをかける人々が創った伝統存続への共感と，ズブズブの湿田と水不足の憂いをなくす方向に加担しなければならない職業倫理との狭間に入り込んでしまいました。

私自身には常に分布図・パターン図化の発想が，たとえば青森に多い河童の昔話の舞台はどんなところか，水虎信仰はどこに分布するのか，というように現れます。それどころか，ともすると職場で

地理行列とか修正ウィーバー法などと口走ってしまい，穏やかな浮田先生の笑顔が想起されるにしても，仕事場の周囲からは浮き上がることが幾度かありました。こちらの世界では異色の経歴を持つ変わり者視されていなくもないようです。

「異色の経歴を持つ変わり者」といえば，談話会の中での私もそうでしょう。でも，単なる野合ではなく，地域を観察する地理学の眼を高く保ち続けていると同時に地域を変える者である，いい意味でのハイブリッドでありたいと願っています。

離島への眼差し

長崎新聞社　犬塚　泉（H1 学部卒）

小学校の教師をしている友人ノリコがこの春，ある離島の小学校へ転勤した。その小島は長崎県本土と五島列島の間にあり，長崎市から車で二時間の港からさらに一日一往復の定期船で二時間弱。赴任後，彼女が寄こした感想は「すごいところに来てしまった」。島の人口四百人，児童生徒の数は小中学校合わせてたった十五人。銀行もなく駐在所もなく，店は何でも扱う雑貨屋があるのみ。「コンビニのない所で暮らしていけるのか」。その島へ赴任が決まったイマドキの教師は多かれ少なかれそう自問するらしい。飲食店が存在しないため，どんなずぼらな人間だって自炊を迫られるのだとか。

「学校給食を作る職員さんが定年退職したんだけど，後任のなり手がなくて，引き続きその人が臨時雇いの形で勤めてるのよ。みんな『こんな不便な島には誰もわざわざ勤めに来んよー』って言ってる」。ノリコはしみじみ言った。そんなノリコに，私は「その後任，都会で募集をかけたら，応募者が殺到するかもよ」と言った。「まさか。信じられない」とノリコは反応したが，私には一応，そう想像できる理由がある。

私にもノリコ同様，離島暮らしの経験がある。一九九四年から四年間，長崎新聞対馬支局に勤務していた。対馬はノリコの赴任先のような小島ではなく，人口三万人を超える大型離島なのでスーパーも銀行も警察もある（コンビニは一軒だけあった）が，物資全般は本土から運ばれてくる分だけ値段が高く，購買意欲をそそられるほどの種類もない。船や航空機は悪天候の度に欠航し，島内の道路事情は極めて悪い。ノリコほど極端ではないにしても，私は離島生活の不自由さを充分味わった。

そんな離島には若者が好むような娯楽も就職口もない。若者の大半は学校を卒業すると同時に島を出る。それが高度経済成長期以降四十年も続いた今，多くの地域で人口構成が高齢に偏りコミュニティーが崩壊の危機に瀕している。子供の姿が消え，若者の姿が消え，跡継ぎの男性が独身のまま年齢を重ねていく社会。行政は観光開発だ漁業振興だと必死に手を打っているのだが，どれも効果は上がらない。こんな過疎の悩みはノリコの小島であろうと対馬であろうと全く同じだ。

対馬支局でそんな実情を目の当たりにした私は，その後福岡支社へと転勤した。福岡は言わずと知れた九州一の大都会。高層ビルが建ち並び，地下鉄が走り，対馬の生活とは何もかもが違う。そこで私は，離島へ向けられる視線が全く異なることに気付いた。福岡市場をターゲットにした離島観光ＰＲイベントの取材に行き，訪れた福岡市民に離島の印象を聞くと，「島は自然が豊かで食べ物がおいしい」

「人情味がありそう」「ぜひ行ってみたい」とプラスイメージばかり返ってくる。福岡の大型書店には，田舎への移住を希望する人のための情報誌が何種類も並んでいるのだ。

そんな情報誌の編集者の一人に取材したことがある。彼は読者から寄せられたハガキの束を私に見せてくれた。それらのハガキにはどれも，「ごみごみした都会で仕事に追われて暮らすのはもう疲れた」「人間らしいペースで生活したい」「憧れの田舎生活を早く実現させたい」という趣旨のことが書いてあった。ああ，憧れの田舎生活！　過疎対策に苦悩している対馬の町役場の人がこの言葉を聞いたらめまいがするのではないか。

世間ではグリーンツーリズムというものがブームになっている。田舎に対する都会の人々の視線は，後進地と見下ろす一方だった一昔前に比べ随分変質している。都市生活に倦んだ人々は第一次産業に憧れ，田舎人は民泊や農業体験の場を都会人に提供する。お互いのニーズが噛み合った幸せな蜜月関係。役場の斡旋によって都会から人が続々と移住してきた地方もある。例え不便な生活であろうとも，第一次産業系の低賃金の仕事しかなくても，豊かな自然の中でのんびり過ごす喜びは何物にも代え難いものだとか。

私が事情を知る長崎県の多くの離島では，そんな都会人の憧れの視線を正面から堂々と受け止められるだけの自意識はまだ育っていない。本土からの訪問客が「自然が豊かでいいところですね」と褒めても，島の人は複雑な思いを抱えながら「何もないところですけど」と応えるのが精一杯。「島に移住したい」という都会人が現れたとしたら，歓迎するよりもむしろ「何の気まぐれか」とその真意を訝るだろう。過疎の現実に生きる島の人にとって「憧れの田舎暮らし」という表現は今のところ空疎なフレーズに過ぎない。

離島に憧れる都会人の眼差しは，いつか離島住民の自意識と噛み合う日が来るのだろうか。「憧れの島暮らし」という言葉が離島住民に実感を持って響くのは，島の生活に憧れる都会の若者が続々と島へ移住し，都会に憧れて島を出た若者の不在を埋めた時だろう。これは夢想か，それとも現実的な可能性か。私は今とりあえずノリコに対し，「島でしか味わえない暮らしをエンジョイしておいで」と励ましている。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～研究紹介～

平成14年4月11日から8月3日まで，青山裕子先生が，安倍フェローシップによる外国人共同研究者として地理学教室に滞在されることになりました。先生は，国際基督教大学をご卒業後，米国のカリフォルニア大学ロサンジェルス校で修士課程を修了され，同バークレー校で博士課程を終えて，Ph.D を取得されました。その後，ジョージア大学地理学科助教授を経て，現在クラーク大学地理学科助教授でいらっしゃいます。当教室での研究計画は，以下の通りです。

（石川義孝）

情報化時代における起業
―工業資本主義における職人の伝統の超克と日本の将来―

青山裕子

本計画は，日本というコンテクストにおける地域文化の形成と社会的構築を検討し，日本・米国における起業家精神の発展にさいしての地域的な企業社会の果たす役割を分析するものである。地域文化は，シリコンバレーの成長の重要な一要因と考えられてきたが，米国の他地域や米国以外へのその適用可能性は，依然として疑問の余地がある。日本においては，起業が弱いという今日の認識が，小企業政策の近年の転換を促す緊急の政策的関心となっている。本計画は，浜松・京都・東京・ボストンの事例研究を通じて，起業の発生過程と地域文化の役割の，より深い理解をめざすものである。IT 産業における活発な起業は，さらなる経済成長にとってきわめて重要と考えられるので，その促進は，工業化諸国における広範な政策的含意を持った一般的な挑戦課題である。

起業というテーマは，経済発展に関する多くの研究の一焦点をなしてきたが，その定義，形成の過程，効果的な促進方法をめぐっては，まだコンセンサスがない。起業が国際的な視角をもって検討されたことはめったにないし，その結果，地域的伝統，文化的規範，商慣習といった，起業の動輪としての重要な基盤は，概して無視されてきた。

この研究では，以下のような広い理論的な問題を集中的に扱う。すなわち，情報化時代における起業を形作る地域的諸活動の特徴・過程・パターンとは何か？

そして，起業の発生過程と地域的な起業環境の形成のより深い理解をめざす。日本における起業増進の問題は，近年では，研究者にとっては理論的窮地，政策立案者にとっては重大で緊急を要する争点となっている。なぜなら，日本は，主要な工業化諸国の間で，操業の開始率，小企業の成長率，企業社会による起業承認率という点で，最低のランクを示しているからである。

日本での起業は，事実上，工業化をめぐる時代遅れの政策指向と，公式・非公式双方の制度的メカニズムの組み合わせによって，制約を受けてきた。既にかなりの実体のある工業的基礎にもかかわらず，活気に満ちた起業の欠如もあって，日本は自国の経済を再活性化できずにいるし，情報化経済への移行が遅かった。

それでは，情報部門における日本の起業は，従来の起業形態とは異なる制約条件や機会の集合に直面しているのであろうか？　また，そのような過程を支えているのは，いかなる地域的ダイナミズムであろうか？　起業を奨励・支援する規定上の枠組みや財政的な構造の違いを除外すれば，日本には起業の比率とパターンに影響を与える，多様な社会文化的な諸力が存在している。本研究は，経済が工業経済から情報経済へとシフトするにつれ，日本における起業のきわめて重要な，しかしほとんど理解されていない側面を研究するものである。研究の主要な目的は，1)情報部門における起業の，リスク処理ならびにインセンティブ発生の特徴を分析し，2)ネットワーク・社会的相互作用・文化的慣習といった，異なった地域的コンテクストが起業の触媒としていかに作用するかを分析し，3)21 世紀をにらんだ起業促進の役割を評価することである。データの収集や起業家との個人的インタビューをはじめとするフィールドワーク実施の予定である。研究のゴールは，起業活動を地域的・制度的な視角から把握し，地域と国家の間における情報経済の発展に関する比較研究のための基盤を作り出すことである。それは，経済活動を規制する地域的な社会文化的

諸制度に起業を結びつける経験的証拠を提供することになろう。

情報化時代の起業に関する私の研究は，複数の理論的潮流を結びつけ，現代の理論的・政策的諸課題にとってのユニークな洞察を与えることによって，独自の革新的視角を提供することになる。理論的レベルでは，本研究は先進的工業経済の経済的変換にさいして起業が有する具体的な役割を検討する。現実的レベルでは，世界第二の経済における起業のダイナミズムの理解は，グローバル経済の成長・安定・将来に関する含意をもたらすことになる。

経済地理学は，本質的に，特定の地域的コンテクストに深く埋め込まれた経済活動の，より広範で厳密な分析のための適切な基盤をもたらす。本研究は，社会学・地域計画学・経営学・経済学などの，複数の学問分野を越えたインパクトも持つことになる，枢要な課題に焦点をあてる。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2001 年 10 月 27 日，文学部において，談話会秋季講演会として，サセックス大学教授 A. J. フィールディング先生，京都大学助教授小方登先生，京都大学助手山村亜希先生に講演していただきました。

移住と職業モビリティ

—移住により豊かになるか：イングランド・ウェールズにおける長期的な研究による証明—

A. J. フィールディング（サセックス大学）

貧困層は富裕層よりも移住性が高いのであろうか。移住することにより，貧困から逃れることは可能なのであろうか。人々が移住することにより，都市地域での貧困の度合いは高くなるのか，それとも低くなるのか。そして，「移住する人々」は移住しない人々に比べ，豊かになりやすいのであろうか，それとも貧しくなりやすいのであろうか。

これらの問いに答えるために使用するデータは，次のとおりである。まず，人口の 1%にあたる人々の個人レベルでの 1971 年，1981 年，1991 年，2001 年の国勢調査追跡記録，および，出生・死亡を常時更新している 50 万人のサンプルのデータ生産である。このデータにより，社会的移動（職業階層の変化）と地理的移動（居住地域の変化）との関連性の研究が可能になる。

職業（社会）階層は，以下のように分類される。上流階級（ごく少数），サービス階級（中産階級，ここには専門職と管理職とが含まれる），小市民（中産階級），ホワイトカラー労働者，ブルーカラー労働者，失業者。

社会階層による移動性は，以下のように示されている。まず，貧困層（肉体労働者や公団住宅の住人）は，ほとんど移住することがないのに対し，失業者は移動性に平均的な値を示している。富裕層（経営者，専門職，地主）は，移動性が非常に高い。しかし，移動性が高いから豊かであるのか，それとも豊かであるから移動性が高いのであろうか。

社会的な移動性と空間的な移動性とを見てみると，この両者には非常に強い関連性が見られる。すなわち，階級や身分に移動性のない者は，空間的な移動性が低く，階級や身分に移動性のある者は，空間的な移動性も高いのである。また，サービス階級（専門織・管理織）へと入

っていく者は，地域間の移住によりおおよそ倍になる。それゆえ，貧困から逃れるためには移住しよう，ということが示される。

移動とロンドンの社会的分極を見てみると，ロンドン（南東部）地域への流入は，社会階級上方への移動，若者，シングルによって占められ，南東部からの流出は社会階級が同じか下方への移動や，家族を伴った熟年夫婦により占められている。南西部での社会階級の数値は，地域間移住がその地域の社会構造の上級部と下級部とを大きくする，すなわち社会的分極が大きくなるような影響が及ぼされることを示している。

一方，エスニック・マイノリティ移民の社会的移動性では，その構成員，特にアフリカ系カリブ人において失業者という下方への移動が起こりやすい。しかし，特に南アジア，あるいはアジア系アフリカ人においては小市民という上方へ移動する傾向も強く見られる。そして，若いアジア系の人々が高率で専門中産階級に入ってくるなど，アジア人の中産階級も確固として存在している。

衛星写真で見る西アジアの都城遺跡

小方　登
（昭和 55 年卒）

ここでは，衛星写真を利用して，西アジアの都市遺跡や歴史的都市の立地とプランを考察し，衛星写真を含むリモートセンシングデータの，歴史・文化的分野への応用可能性について論じてみたい。発表者の専攻分野は，もともと現代の都市地理学で，コンピュータを使った統計処理などである。それを通して関心が地理情報処理に向かい，衛星画像を扱うようになった。衛星画像のようなリモートセンシングデータは，従来は自然科学的な分野で応用されてきたが，私はそれを歴史・文化的な分野に応用することを試みてきた。

従来から知られている衛星画像は，Landsat に代表される地球観測衛星のものである。これらの画像データを遺跡探査などの目的に応用する試みも従来行われてきたが，Landsat が提供する画像の解像度は地上で 30m，解像度が高いといわれる SPOT でも 10m であり，城壁や土地区画の詳細を判読するためには不足していた。

そこで，1995 年に米国政府が公開した CORONA 衛星写真に着目した。CORONA 衛星写真は，1960 年代に米国が収集した偵察衛星写真であり，カメラとフィルムを用いる文字通りの写真であるという点で，従来から知られているデジタル衛星画像とは異なる。撮影済みフィルムを格納したカプセルは，パラシュートで投下され，飛行機を使って空中で回収された。

CORONA 衛星には，以下の利用上の利点がある。①より新しい世代の地球観測衛星の画像と比べても，かなり解像度が高い。②衛星に 2 台のカメラを搭載することにより，立体視を可能とする。③撮影時期が古いため，開発や都市化による改変以前の景観についての情報を提供する。以上の諸点をふまえて，西アジアの都市遺跡や歴史的都市を，いくつかのカテゴリーに分けて，衛星写真上で検討した。

第一に類型化されるのが，ヘレニズム時代にシリアにおいて創建あるいは拡張された都市である。アレクサンダー大王の東征以後，西アジアではギリシアの文化と土着の文化の融合が起こり，ヘレニ

ズム世界が形成された。大王の領土のうち東方を引き継いだセレウコス朝は，多くの都市を領内に建設したが，それらはギリシア的な立地とプランの特徴を有していた。立地の特徴としては，段丘崖など地形の特徴を利用して，囲郭を構築していることなどがあげられる。プランの特徴としては，「ヒッポダモス式」と呼ばれる計画的な格子状街路網を構築したことなどである。例として，アンティオキア，アパメア，ラオディケアなどを取り上げた。また，ダマスカスやアレッポといった既存の都市にも，格子状街路網などを付加する改変が行われた。

第二に，ティグリス川中流域に位置するアッシリアの都城を検討した。アッシュール，カルフ（ニムルド），ドゥル・シャルキン（ホルサバード），ニネヴェなどの都城は，既存のテル（遺丘）を核として，その周囲の広大な領域を城壁で囲繞した入れ子の構造を持っていたことが，衛星写真から読みとれた。

第三に，ユーフラテス川下流域の，バビロニアの都城遺跡を検討した。バビロン，ウル，ウルク，ニップールなどである。これらは非常に古い時代のもので，古い流路に沿って立地していた。流路の変遷により，現在は砂漠に埋もれ，遺跡として識別することすら難しいものもある。衛星写真から旧流路を検討した。ニップールについては，粘土板に刻まれた都市図が知られており，そこには川の流路や人口の水路が記されている。衛星写真上でこれらについても比定した。

その他，アケメネス朝ペルシアの都市—パサルガダイ，スーサ，ペルセポリス—などについても検討した。CORONA 衛星写真は，従来の考古調査よりも巨視的な観点から，遺跡などの立地やプランについての情報を与える。幾何的ひずみを除去し，地図など他の地理情報との重ね合わせを可能とすること，ステレオ写真のマッチングにより，地形モデルを構築することなどが，有用性を引き出すためのさらなる検討課題である。

日本中世都市の形態・機能と空間認識

山村亜希
（平成８年卒）

1980 年代以降の中世都市研究は，文献史学・考古学・建築史学・城郭史・歴史地理学といった複数の学問分野によって担われる学際的研究として進展した。そこでは，都市「空間」の具体的な形態や機能の復原を通じて，都市社会の構造やその変化に論及しようとする議論が盛んに行われ，そういった議論はしばしば「空間」論と呼ばれた。これは，文献史学の網野善彦によって 1970 年代以降に発表された都市論の影響が大きい。しかし，盛んな議論が展開される一方で，近年，紋切り型の都市像ばかりが再生産されるという閉塞状況も指摘されている。

この一つの要因としては，「空間」という用語が明確に定義されぬまま多用されていることが挙げられよう。中世都市研究に大きな影響力を与えた網野善彦の都市論における「空間」とは，都市の機能や都市に特有な現象，さらにそれらを規定する「無縁」の原理の存在を指すものであった。それに対し，1980 年代以降の都市論は，考古学・建築史学の積極的な参加を得て，具体的で復原可能な地理的・物理的形態を「空間」として取り扱ってきた。このように，同じ「空間」という語を用いながらも意味するものが異な

っている。しかし，資料的制限の大きい中世都市研究においては，しばしば網野都市論における観念的な「空間」概念を，無限定に個別事例の具体的な「空間」に敷衍させてきた。このような「空間」概念の混同は，既存の見解を無批判に各地の事例に適用する事態を招きやすい。

中世都市研究において「空間」概念を整理するためには，「空間」を，現実の空間構造と，同時代の人（集団）による空間認識とに区分して論じるという視角が有効であろう。空間認識の分析は，誰が，いつ，どの空間を認識し，どのような意味を付与したのか，を具体的な事例に則して実証的に問うことを可能にし，中世の人（集団）の空間に対する意識を，同時代の社会の文脈に即して評価することができる。ここから，網野都市論における観念的な「空間」を一旦実証的なレベルで検討し，それと80年代以降の都市論における「空間」との関係を論理的に検討することが可能になるだろう。

まず，13 世紀の豊後国府を対象に検討を加える。豊後国府には，仁治3年（1242）に大友氏が自らの領国豊後国の「府中」に対して制定したとされる法令・「新御成敗状」が存在する。ここには，商業活動が盛んで人の往来も多い活発な都市の様子とともに，屋地の給付や墓所の追放などに関して強い権限を有する制定者・大友氏の姿が描かれている。

しかし，現実には，政治機能や港湾機能が分散して展開する分散的な空間構造を呈しており，「新御成敗状」の制定を挟んでも空間構造の大きな転換は見受けられない。また，発達した商工業機能や大友氏の強い統制も想定できない。現実の豊後国府の分散的な空間構造や大友氏の空間統制の実態は，「新御成敗状」に描かれた「府中」像と大きく乖離している。さらに当時の大友氏をめぐる政治状況を勘案すると，「新御成敗状」に表れる求心的な「府中」像は，現実の豊後国府空間とは異なる，大友氏の理念的な空間認識であったと考えられる。

次に，南北朝期の長門国府の空間構造とその認識について同様の検討を行った。当時の長門国府は，南北朝期の不安定な政治情勢を反映し，守護，寺社や国衙在庁官人，鋳物師集団など複数の勢力が個別に中央の政治権力と関係を取り結びつつ，独自に空間を支配していた。これらの諸勢力は，必ずしも対立するだけではなく，時には協調，利用し，一体化するなど，互いに複雑で流動的な関係を取り結んでいた。長門国府は分散的で複合的な空間構造を呈していた。

しかし，南北朝期の長門国府の景観を描いた『忌宮神社境内絵図』は，長門国府を全体として一まとまりの統一された空間として描いている。それは，忌宮神社を中心とした，古代都城の理念的形態に近い方形の求心的な構図として表現される。ここから，忌宮神社という在地領主権力は，長門国府空間を自らを中心に据えた求心的で統一的な構造として認識していたことが分かる。この忌宮神社の空間認識は，分散的・複合的な現実の空間構造とはかけ離れたものであった。

以上のように，中世国府においては，現実には分散的・複合的な空間構造を呈しているにも関わらず，領主権力の空間認識は求心的で統一的なものであった。他の事例をふまえると，この領主権力の空間認識と現実の空間構造との乖離は，中世前期都市において一般的であった可能性が高い。

最後に，大内氏を領主権力とする中世後期の周防国山口について検討した。中世後期の山口も中世国府と同様に，諸機

能・諸施設が分散して立地する空間構造を成していた。しかし，山口では，大内氏の権力構造に組み込まれた宗教・政治・町空間が，十五世紀後期以降徐々に拡大していくという点が，中世前期都市と異なる。すなわち，大内氏は自らの都市計画的な空間認識を，一定程度都市空間に実現できるようになったと考えられる。その他の中世後期地方都市においても，十六世紀前後から，分散的・複合的な空間構造が，領主権力の統制の及ぶ範囲が拡大する構造に近づくことから，山口のように領主権力の空間認識が一定程度実体化されるようになったと推測される。領主権力の空間認識が実体化しえた要因の一つとしては，都市民や周辺住人に芽生え自覚化され始めた「地域」認識を，領主権力が利用ないし共有していったことが推定される。

このように現実の空間構造と領主権力の空間認識という二つの側面から，中世都市「空間」にアプローチすると，両者が必ずしも一致するものではなく，しばしば乖離していたことが分かる。その乖離にこそ，その時代のその地域における政治・社会・経済・文化構造が深く関連していたと思われる。

現在の中世都市研究は学際的研究として進展してきたが，それゆえに，学問分野によって「空間」の意味するものが異なってきた。現在は，研究対象である「空間」に，もっと慎重にアプローチしていくことが必要な時期にさしかかっているのではないだろうか。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～研究室便り～

＜オープンキャンパスについて＞

昨年，人文地理学会では，地理学に対する一般社会からの関心を高めるための初めての試みとして，『地理学ウィーク関西 2001』を実施しました。当教室では，この催しの一環として，昨年７月 30 日（月），地理学教室主催の「オープンキャンパス」を実施しました。関西一円から高校生（２年生と３年生）と父兄あわせて９名の参加があり，なごやかな雰囲気のうちに，教室の概要説明や GIS システムのデモンストレーション，博物館での古地図見学などが行われました。詳しくは，当教室のホームページをご覧ください。

本年度は，京都大学あげてのオープンキャンパスが８月８日（木）・９日（金）の２日間にわたって開催されることになっております。多数の高校生のご参加をお待ちしております。

＜国際交流について＞

昨年度夏から今年度初めにかけて，海外から３名の先生方が来校されました。

昨年 10 月から６ヶ月間，イギリスのサセックス大学のアンソニー・J・フィールディング教授が当教室に客員教授として滞在され，講義のほか，本会報にも掲載しましたように，談話会での講演をしていただきました。また，昨年 11 月から年末までの２ヶ月間，中華人民共和国の西北大学から趙栄教授が特別研究員として当教室に滞在され，12 月５日には「中国西部大開発と地域経済発展」と題した講演をしていただきました。

また，本年４月上旬から８月までの予定で，アメリカ合衆国からクラーク大学

の青山裕子助教授が当教室に滞在される予定です。本会報で，青山先生のご研究を紹介しておりますので，どうぞご覧下さい。

＜研究室の動静＞

教室の事務は，引き続き，真木智子さんにお願い致しております。

本年度は，大学院博士後期課程５名，研究生２名，聴講生１名，修士課程６名，科目等履修生１名，学部４回生 10 名，３回生４名となっております。

〈研究室の新メンバー〉

本年度は３回生を４名，外部からの修士課程入学者を２名，教室に迎えました。また，昨年秋にはイギリスからの研究生も１名加わりました。簡単に自己紹介していただきます。

（３回生）

鈴木地平

大津市の自宅から通学しています鈴木地平と申します。旅が好きで長期休暇の度に 18 切符を握って旅に出ます。先日も松山の地下道で新聞を敷いてホームレス体験をしたのですが、午前３時頃寒さに負けて近くの牛丼屋に逃げ込みました。どうぞよろしくお願いします。

山岡暁

語学をはじめ、取りこぼしている単位を無事とれるか？２年間サボリまくっていて、特に明確にやりたい事が決まっているわけではないがそんなことで本当に大丈夫か？等々不安の種は尽きませんが、ひとつひとつ頑張っていきたいと思っています。

山本浩介

京大陸上ホッケー部、不動の左サイドバックとして全日本学生選手権にも入場。が、左手の重傷により志半ばでこの春引退。やることがなくなったので石川先生の下、みっちりと地理学に耽りたいと思っております。主な感心は観光地理学、そしてマレーシア。

渡辺克己

４月から地理学教室のお世話になります渡辺です。出身は岡山県総社市です。これから都市地理学を中心に勉強して行こうと考えています。ご指導よろしくお願いします。

（修士課程１回生）

高山圭介

学部時代を神戸で４年、サラリーマン時代を大阪で５年過ごした後に、京都という歴史のある街で勉強できることとなり、関西への不思議な縁を感じていると同時に、この機会を最大限に活かして頑張ろうと思っています。北九州市出身です。よろしくお願いします。

埴淵知哉

今年、修士課程に入学した埴淵と申します。徳島から来ました。まだ京都に来て間もないので、頭の中では京都駅から大学までしか地図が出来ていません。専門は都市・経済地理学で、企業組織と都市システムについて研究しています。よろしくお願いいたします。

（研究生）

クリストファー・マキュー

(Christopher　McHugh)

1976 年、英国 Newcastle 生。Durham 大学社会科学部考古学科卒業。Cambridge

大学院考古学部世界考古学 MPhil 修了。民族学的社会文化的ｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨについて考古学的な解釈を行うことに興味を持っている。特に、過去においてｱｲﾃﾞﾝﾃｨﾃｨに対して空間やさまざまな物がどのような影響を与えたかに関心がある。民族学的考古学的視覚からｲﾝﾄﾞと歴史的日本の untouchability(「不可触民」)についての比較研究を行い、それぞれのｺﾝﾃｸｽﾄにおいて、不可触民がいかに都市空間形成に関わり、それが歴史的にどのように解釈されてきたのかを検討しており、京都大学での研究の機会を活かして、日本での資料収集に努めたい。

〈昨年度の実習旅行〉

2001 年度は，10 月 15 日～ 18 日まで，徳島県小松島市において，２回生・３回生の計７名が調査を行い，報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

＊学部卒業生

朝見　優子	多摩市役所
石田　陽介	大学院文学研究科
北原　弘嗣	三菱重工（株）
木下　芳大	ＪＲ東日本
木村　理恵	文学部科目等履修生
小林　理子	奈良市役所
吉村　健志	（株）クラレ

＊修士課程

中村　尚弘	大学院聴講生
村田　陽平	大学院文学研究科

＊博士課程

岩崎しのぶ	私立高校教諭

〈院生の研究状況の報告〉

Ｄ３　有留　順子

・性差から見た大都市圏における通勤パターン―大阪大都市圏を事例として―，人文地理 49-1，47-63 頁（1997）《共著》

Ｄ３　泉谷　洋平

・棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係―コンテクスチュアルな視点からの因果分析―，人文地理 50-5，83-97 頁（1998）

Ｄ２　上杉　和央

・飛鳥・白鳳期における寺院の立地について，史林 82-6，125-149 頁（1999）

・近世における浪速古図の作成と受容，史林 85-2，33-73 頁（2002）

Ｄ２　山神　達也

・わが国における人口分布の変動とその日米比較，人文地理 51-5，79-96 頁（1999）

・わが国の３大都市圏における人口密度分布の変化―展開クラークモデルによる分析―，　人文地理 53-6，1-23 頁（2001）

Ｄ１　村田　陽平

・中年シングル男性を疎外する場所，人文地理 52-6，1-19 頁（2000）

研究生　Tim Reiffenstein

・Crossing culture, leaning to export: making houses in Britishe Columbia for consumption in Japan, Economic Geography, Vol.78, No.2, pp.195-220（2002）.《共著》

大学院聴講生　中村　尚弘

・元島民・子孫による北方領土返還運動の形骸化，人文地理 52-5，90-106 頁（2000）

Ｍ２　中辻　亨

・森林管理組合からみた入会林野整備事

業の意義―京都府宇治田原町・和束町を事例として，人文地理 54-1，24-39 頁 (2002)

〈学位の取得〉

平成13年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

＊論文博士

溝口　常俊：「日本近世の畑作地域史論」

＊課程博士

今里　悟之：「村落空間の文化・社会地理学的研究」

李　禮淑：「近現代におけるコリアンの移住と新たな社会空間づくり」

〈2002年度講義題目〉

＊講義（系共通科目）＊

教授　石原　潤　地理学講義

＊特殊講義＊

教授　石川義孝　アジア・太平洋地域における人口移動変化

人環教授　金坂清則　地理学における人物研究の諸問題

総人教授　山田　誠　比較地域形成論

人環助教授　小方　登　空から見たユーラシアの歴史景観

人環助教授　小方　登　地理情報システムの原理と応用

理学部教授　岡田篤正　自然地理学

経研教授　藤田昌久　地域経済論

講師　平野昌繁　空中写真で見る地形災害

講師　藤巻正己　開発途上国の都市社会地理学

講師　八木康幸　民俗文化の地理学的研究

講師　山崎　健　オフィス立地と都市地域構造

講師　有薗正一郎　在来農耕の技術から地域の性格を考える

＊演習Ⅰ＊

教授　石原　潤　地理学演習Ⅰ

教授　金田章裕　地理学演習Ⅱ

教授　石川義孝　地理学演習Ⅲ

助教授　田中和子　地理学演習Ⅳ

＊演習Ⅱ＊

教授　石原　潤　人文地理学の諸問題

教授　金田章裕　〃

教授　石川義孝　〃

助教授　田中和子　〃

＊講読＊

教授　石原　潤　英語地理書講読

教授　谷川　稔　フランス地理書講読

助教授　田中和子　ドイツ地理書講読

人文研助手　村上　衛　中国地理書講読

＊地理学実習＊

教授　石川義孝

助教授　田中和子

博物館助手　山村亜希

＊大学院演習＊

教授　石原　潤　地域の諸問題

教授　金田章裕　〃

教授　石川義孝　〃

助教授　田中和子　〃

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～事務局から～

＜地理学談話会2001年度会計報告＞

(2001年４月１日～2002年度３月31日)

【資金会計】

〈収入〉

年会費	172,283
前年度繰越金	296,096
計	¥ **468,379**

〈支出〉

運営費への振替	326,557
次年度への繰越	141,822
計	¥ **468,379**

【運営費会計】

〈収入〉

支出会計からの振替	326,557
秋季懇親会会費	82,000
春季懇親会会費	111,500
計	¥ **520,057**

〈支出〉

秋季懇親会経費	94,575
春季懇親会経費	144,585
会報・名簿等印刷費	129,680
通信・文具等費	146,860
弔電等	4,357
計	¥ **520,057**

＜訃報＞

前回の会報以降，次の方々がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分，括弧内は卒業年，敬称略)

渡辺　茂蔵（昭和７年卒）

細井　淳志郎（昭和 22 年卒）

＜お知らせ＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局までご一報ください。（数字は卒業年，敬称略）

青木　秀和	平成 03
朝井　小太郎	昭和 06
尼子　雅一	昭和 62
荒賀　紀子	平成元
生田　博文	昭和 51
池内　麟太郎	昭和 48
石角　強	昭和 45
石原　大嗣	平成 09
石村　裕輔	平成 04
今井　平八	昭和 19
岩部　敏夫	平成 03
江崎　健治	平成 04
遠藤　元	平成 08
遠藤　正雄	昭和 53
大野　宏	平成 04
大山　晃司	平成 07
岡本　靖一	昭和 42
興津　俊之	平成 03
小口　稔	平成 03
楓　雅之(泰昌)	昭和 20
柿沢　洋雄	昭和 60
勝村（赤座）眞知子	昭和 48
加藤　典嗣	昭和 63
川添　和明	平成 07
貴志　謙介	昭和 56
木地　節郎	昭和 24
坂部　誠治	平成 03
渋谷　良治	平成 04
新谷　泰久	平成 02
瀧端（正木）真理子	昭和 56
田島　渡	昭和 23
塚本　誠	平成 02
都子	昭和 15
角田（江下）以知子	平成 09
中川　訓範	平成 09
中山　耕至	平成 05
那須　久代	昭和 63
西尾　正隆	昭和 45
西沢　仁晴	昭和 49
西山　隆彦	平成 07
野田　茂生	昭和 36

長谷川　正雄	昭和 52
林　宏	昭和 16
福田　新一	昭和 46
松本　弘史	昭和 58
御手洗　央治	平成 05
山口　一郎	昭和 55
山下　和久	昭和 57
山下　良	平成元
山田（児玉）憲子	昭和 45
吉野　修司	平成 07
六嶋　美也子	平成 05

＜京都大学文学研究科フォーラムのご案内＞

京都大学文学研究科主催の国際フォーラム「京都から世界へ―知の次なる一歩―」が，6月15日（土）午後1時～5時まで，京都会館第2ホール（京都市左京区岡崎公園内）で開催されます。ジョン・ローゼンフィールド（ハーバード大学名誉教授）の講演「日本文化の転生―重源の事跡―」（日本語）に続き，シンポジウムも予定されております。一般公開（参加無料）の催しです。参加申し込みは，住所・氏名を記し，ハガキ・ファックス・E-mail で下記までお願いいたします。

〒606-8501　京都市左京区吉田本町
京都大学文学研究科フォーラム係
FAX：075-753-2719
E-mail：forum@bun.kyoto-u.ac.jp

＜『史学』公開シンポジウムのご案内＞

文学部史学系講座による『史学』公開シンポジウム「歴史学の現在を問う」が，11月30日（土）午前10時30分～午後5時まで，本学文学研究科第3講義室において開催されます。Lother von Falkenhausen（UCLA 教授，本学客員教授）による講演などの他，パネル・ディスカッションも予定されています。

＜2002年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞

本年度は下記のように実施する予定ですので，よろしくお願いいたします。

10月26日（土）午後2時～5時
講演予定者：
由井濱　省吾（岡山大学名誉教授）
山近　博義（大阪教育大学・教育学部助教授）
今里　悟之（大阪大学・文学研究科助手）
懇親会：同日午後6時より（会場未定）

☆本年度の談話会費（1000 円）を未納の方は，同封の振込用紙にてお払いくださいますよう，よろしくお願いいたします。

【編集後記】

ご寄稿，ご講演くださいました先生方，ありがとうございました。

編集　村田　陽平
　　中村　尚弘
　　真木　智子

会報　第13号

発行日　2002年５月31日
発行者　地理学談話会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL 075-753-2793（直通）
発行所　京都大学文学部地理学教室
URL　http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/